

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2007～2010

課題番号：19401007

研究課題名（和文）「マニラ戦」の実像と記憶：平和のための地域研究

研究課題名（英文）The Truths and Memories of the Battle for Manila 1945: Area Studies for Peace

研究代表者

中野 聡 (NAKANO SATOSHI)

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：00227852

研究成果の概要（和文）：第 2 次世界大戦末期の「マニラ戦（1945 年 2 月 3 日～3 月 3 日）」の実像と記憶を学際的・総合的に検討し、さらにその研究成果を国際研究集会などにより公開・社会還元することにより、日・比・米など関係諸国間で戦争の過去をめぐり「より質の高い対話と和解」を可能にする学術基盤の整備を推進した。

研究成果の概要（英文）：The project focuses its attention on the truths and memories of the battle for Manila (Feb. 3 - Mar. 3, 1945) by a multi-disciplinary team of scholars working on truths and memories of the battle. The project contributed to facilitate academic basis to enable “more meaningful dialogue and reconciliation” on the war’s past between Japan, Philippines, and the United States.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
2008 年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
2009 年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2010 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
年度			
総計	12,500,000	3,750,000	16,250,000

研究分野：複合領域

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：歴史学 政治学 地域研究 社会系心理学

1. 研究開始当初の背景

1980 年代に日比間では戦争の記憶の風化が進み「歴史問題」という点では無風状態とも言える状況に到ったが、1995 年前後から、日中・日韓の「歴史問題」摩擦などに刺激されて、フィリピンでも日本側の忘却に対する抗議を含んだ「フィリピン戦」の記憶再構築とも言える現象が報道や出版、戦争犠牲者追悼行事などを通じて観察できるようになった。こうして戦後 60 年を超えて戦争の記憶が再構築されつつある現状を踏まえつつ、日中関係における「南京事件」と

同様に象徴的な争点として政治化する潜在的可能性を孕んでいる「マニラ戦」をめぐり国際的な学術共同研究を組織した。

2. 研究の目的

本研究は、第 2 次世界大戦末期の「マニラ戦」を対象を絞り、これを「実像」と「記憶」の両面から学際的・総合的に検討し、さらに収集史料と研究成果を翻訳・発信することにより、戦争の過去をめぐり日本・フィリピン（比）・アメリカ合衆国（米）など関係諸国間の「より質の高い対話と和解」実現の一

助となること、すなわち平和のための地域研究を目的とする。

3. 研究の方法

(1) 真実＝「マニラ戦」における民間人の大量死と残虐行為・都市破壊の原因究明：文献資料調査およびオーラル・ヒストリーの収集と分析。

(2) 記憶＝第2次世界大戦後における「マニラ戦」問題の展開 ①「マニラ戦」をめぐる戦争責任問題の展開 ②加害・被害の関係者や関係諸国民への社会・文化精神医学的な影響 ③「マニラ戦」の記憶と表象 ④なぜこの問題が「南京事件」のように関係諸国間で「歴史問題」化していないのか ⑤今後「歴史問題」化する可能性はないのか ⑥「真実と和解」の望ましい道を実現するための課題は何か：以上の課題について文献資料調査、オーラル・ヒストリーの収集と分析、参与観察などを実施し、その研究成果を、国際研究集会などを通じて実践的に社会に還元してゆく。

4. 研究成果

(1) 「マニラ戦」の実像と記憶に関する資料文献調査、オーラル・ヒストリーの収集

当事国である日本、フィリピン、アメリカ3カ国の研究者による冷静で客観的な学術共同研究を通じて史資料と歴史認識を共有する。とくに、これまでアジア・太平洋戦争史研究で成果をあげてきた日本の現代史研究者を日米比のフィリピン研究者との共同研究に組織することにより、「マニラ戦」の実像の解明に迫った。具体的には以下の調査を実施した。

- * 2007 米国立公文書館におけるマニラ戦史資料調査(林、中野)、同・戦犯裁判資料調査(永井)
- * 2008 米国立公文書館におけるマニラ戦史資料調査(林)、同・戦犯裁判資料調査(永井)、マニラ文書館におけるマニラ都市史調査(中野)
- * 2009 マニラ文書館におけるフィリピン戦犯裁判資料調査(永井)
- * 2010 フィリピンにおける補充的資料調査(永井、中野)

(2) オーラル・ヒストリーを含めた史資料の収集・整理と相互翻訳

学術研究上の史資料収集はもちろんのこと、本研究では、専門研究者が収集し選定した日本語史料の英訳と、英語・フィリピン諸

語史料の日本語訳と公開(出版)を通じて関係諸国民が「マニラ戦」をめぐる対話ができる環境整備への貢献をめざした。研究期間中に史料集の出版には至っていないが資料の選定を終え、出版の準備を進めている段階である。具体的には下記の調査・事業を実施した。

- * 2008 マニラ戦およびフィリピン戦に関するインタビュー・テープのデジタル・テキスト化(中野)
- * 2009 米国、フィリピンのマニラ戦生存者に対するオーラル・ヒストリーの収集(中野)およびスペインにおけるマニラ戦生存者に対するインタビュー調査(研究協力者・荒沢千賀子)

(3) 国際研究集会・シンポジウムの開催

とくに本研究では日米比3カ国の異分野(歴史学・政治学・社会精神医学・文学・文化研究)の研究者の活発な交流と認識の共有を重要な目的として定め、それらの成果を公開シンポジウムというかたちで社会に還元することをめざした。とくに70周年を迎えたいわゆる「南京事件」との比較・相関研究がきわめて重要であるという観点から、研究組織に笠原十九司氏を加える変更を行い(2007年7月)、笠原氏を研究分担者に加えた国際研究集会を期間中4回実施した。また本研究の締めくくりとして、日本では初めてフィリピンからマニラ戦生存者を招きいての国際シンポジウムを開催した(当初は2011年3月に開催予定だったが、震災のために2011年7月に延期して開催した。)

<本研究の主催・共催により開催した研究集会、本研究組織に属する報告者、開催日、開催場所>

- * CsPR レクチャー・シリーズ『『敗者の裁き』というアポリア：第2次世界大戦後の戦犯問題をめぐる日本側対応』永井、2007年7月9日(一橋大学)
- * 国際研究集会「南京事件とマニラ戦」フロレンティーノ・ロダオ、笠原、中野、2007年12月7日(一橋大学)
- * 国際研究集会 Truths and Memories of the Battle for Manila 1945 中野、笠原、リカルド・ホセ、リディア・ホセ、2008年3月18~19日(フィリピン、アテネオ・デ・マニラ大学)
- * 国際研究集会「マニラ戦の実像と記憶」リカルド・ホセ、リディア・ホセ、中野 2008年10月24日(一橋大学)
- * CsPR レクチャー・シリーズ「日本占領

下の対日協力者」寺見、2009年3月26日（一橋大学）

- * CsPR レクチャー・シリーズ The Israeli-US Gaza Rampage and Its Aftermath: Lessons for Japan ハーバート・ビックス、2009年3月26日（一橋大学）
- * 国際研究集会 Battles of Manila and Nanjing: Atrocity, Justice and Reconciliation 中野、笠原、ヤン・ダーチン、2009年11月6日（ワシントンDC：ジョージ・ワシントン大学エリオット・スクール）
- * 国際研究集会 Nanjing 1937 / Manila 1945: Remembrance and Reconciliation 中野、笠原、2010年3月16日（ハワイ大学マノア校フィリピン研究センター）
- * 国際研究集会 マニラ戦の実像と記憶：未来に向けていかに記憶するか イサベル・カーロ・ウィルソン、ベニト・レガルダ・ジュニア、ヤン・ダーチン、ロリ・ワット、中野、笠原、林、永井、2011年7月24日（一橋大学）

(4) 研究成果の社会還元

「マニラ戦」の非戦闘員犠牲者を追悼するフィリピンの市民団体「メモラーレ・マニラ1945」および、日比間で元兵士と戦争被害者の民間交流の促進をはかるNPO団体「ブリッジ・フォー・ピース」の活動に参加観察するとともに両団体に対して研究プロジェクトの成果を還元した。NHKドキュメンタリー番組の製作にも協力した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計26件）

- ① 中野聡、新刊書紹介：永井均著『フィリピン戦と対日戦犯裁判 1945-1953年』、東南アジア歴史と文化、査読無、40、2011、183-187。
- ② 笠原十九司、日本の戦争責任「免責」の歴史構造—戦後日中関係の視点から、戦争責任研究、査読無、70、2010、17-31。
- ③ 林博史、米軍基地と植民地主義、戦争責任研究、査読無、70、2010、6-16。
- ④ 林博史、資料紹介：日本軍の命令・電報に見るマニラ戦、関東学院大学経済学部総合学術論叢『自然・人間・社会』、査読有、48、2010、69-95。
- ⑤ 笠原十九司、日本軍・日本兵による性暴力の意識と構造—「前近代」の「日本の

戦場」の継承、歴史学研究、査読有、849、2009、11-19。

- ⑥ 中野聡、カルメン・ゲレロ・ナクピルと「マニラの死」：「対象喪失」の同時代史をめぐる予備的考察、同時代史研究、査読無、1、2008、22-32。
- ⑦ 笠原十九司、日本軍・日本兵による性暴力の意識と構造—「前近代」の「日本の戦場」の継承、歴史学研究、査読有、849、2009、11-19。
- ⑧ 笠原十九司、南京事件70年の日本と世界、歴史学研究、査読有、835、2007、18-27。

〔学会発表〕（計17件）

- ① 笠原十九司、日本軍の暴力化の背景としての中国戦線：治安戦＝三光作戦を事例に、マニラ戦の実像と記憶：未来にむけていかに記憶するか、2011年7月24日、一橋大学（第3研究館）。
- ② 林博史、マニラ戦とベイビューホテル事件、マニラ戦の実像と記憶：未来にむけていかに記憶するか、2011年7月24日、一橋大学（第3研究館）。
- ③ 永井均、象徴としてのマニラ戦：米太平洋陸軍の戦争犯罪捜査をめぐる断章、マニラ戦の実像と記憶：未来にむけていかに記憶するか、2011年7月24日、一橋大学（第3研究館）。
- ④ 中野聡、Battle of Manila 1945: Politics of Forgetting and Remembrance、Nanjing 1937 / Manila 1945: Remembrance and Reconciliation、2010年3月16日、Center for Philippine Studies, School of Pacific and Asian Studies, University of Hawai'i at Manoa, USA.
- ⑤ 笠原十九司、Reconciling Narratives of the Nanjing Massacre in Japan and Chinese Textbooks、Nanjing 1937 / Manila 1945: Remembrance and Reconciliation、2010年3月16日、Center for Philippine Studies, School of Pacific and Asian Studies, University of Hawai'i at Manoa, USA.
- ⑥ 中野聡、Battle of Manila 1945: Issues of Truths and Memories、Roundtable: Battle of Manila and Nanjing: Atrocity, Justice and Reconciliation、2009年11月6日、The Sigur Center for Asian Studies, The Elliott School of International Affairs, George Washington University, USA.
- ⑦ 笠原十九司、Nanjing Incident 1937: Issues of Truths and Memories、Roundtable: Battle of Manila and Nanjing: Atrocity, Justice and Reconciliation、2009年11月6日、The

Sigur Center for Asian Studies, The Elliott School of International Affairs, George Washington University, USA.

- ⑧ 中野聡、The Lost City: Carmen Guerrero Nakpil and the Battle for Manila 1945、The 8th International Conference on Philippine Studies、2008年7月24日、Ateneo de Manila University, Philippines.
- ⑨ 中野聡、Battle for Manila: A Japanese View, Truths and Memories of World War II: The Nanjing Massacre and the Battle for Manila、2008年3月18日、Ateneo de Manila University, Philippines.
- ⑩ 笠原十九司、The Nanking Massacre and Political Structure of Its Denial in Japan, Truths and Memories of World War II: The Nanjing Massacre and the Battle for Manila、2008年3月18日、Ateneo de Manila University, Philippines.

[図書] (計 33 件)

- ① 吉田裕、岩波書店、兵士たちの戦後史、2011、299.
- ② 永井均、現代史料出版、近現代日本の戦争と平和 (粟屋憲太郎編)、2011、484(303-366).
- ③ 笠原十九司、岩波書店、日本軍の治安戦、2010、289.
- ④ 林博史、大月書店、沖縄戦が問うもの、2010、255.
- ⑤ 宮地尚子、大月書店、傷を愛せるか、2010、174.
- ⑥ 永井均、岩波書店、フィリピンと対日戦犯裁判: 1947-1953、2010、435.
- ⑦ 林博史、勉誠出版、戦犯裁判の研究—戦犯裁判政策の形成から東京裁判・BC級裁判まで、2010、313.
- ⑧ 笠原十九司、日本評論社、南京事件 70 周年国際シンポジウムの記録、2009、544.
- ⑨ 中野聡、岩波書店、歴史経験としてのアメリカ帝国: 米比関係の群像、2007、407.
- ⑩ 吉田裕、岩波書店、アジア・太平洋戦争、2007、238.
- ⑪ 宮地尚子、みすず書房、環状島=トラウマの地政学、2007、237.
- ⑫ 林博史、高文研、シンガポール華僑粛清—日本軍はシンガポールで何をしたのか、2007、263.
- ⑬ 笠原十九司、平凡社、南京事件論争史、2007、293.

[その他]
ホームページ等

<http://cspr.soc.hit-u.ac.jp/>

一橋大学大学院社会学研究科 平和と和解の研究センター (本科研費関係研究集会の記録など)

アウトリーチ活動

- * 2007 制作協力 (林、中野) NHK 制作「マニラ市街戦: 焦土への一ヶ月」(平成 19 年度文化庁芸術最優秀賞受賞)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中野 聡 (NAKANO SATOSHI)
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号: 00227852

(2) 研究分担者

吉田 裕 (YOSHIDA YUTAKA)
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号: 20166979

宮地 尚子 (MIYAJI NAOKO)
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号: 60261054

林 博史 (HAYASHI HIROFUMI)
関東学院大学・経済学部・教授
研究者番号: 80180975
(H20→H22: 連携研究者)

永井 均 (NAGAI HITOSHI)
広島市立大学・広島平和研究所・准教授
研究者番号: 40347620

笠原 十九司 (KASAHARA TOKUSHI)
都留文科大学・文学部・教授
研究者番号: 80125814
(H19: 連携研究者、H22: 研究協力者)

(4) 研究協力者

ハーバート・ビックス (Herbert P. Bix)
ニューヨーク州立大学ビンガムトン校・歴史学部・教授

リカルド・ホセ (Ricardo T. Jose) フィリピン大学・社会科学哲学部・教授

リディア・ホセ (Lydia N. Yu-Jose) アテネオ・デ・マニラ大学・政治学科・教授

ヤン・ダーチン (Yang Daqing 楊大慶)
ジョージ・ワシントン大学エリオット・スクール・准教授

フロレンティーノ・ロダオ (Florentino Rodao) マドリード・コンプルテンセ大学・情報学部・教授

マイケル・サルマン (Michael Salman) カリフォルニア大学ロサンゼルス校・歴史学部・准教授

アウグスト・エスピリトゥ (Augusto Espiritu) イリノイ大学アーバナシャンペン校・歴史学部・准教授

戸谷由麻 (Yuma Totani) ハワイ大学マノア校・歴史学科・准教授

ロリ・ワット (Lori Watt) セントルイス・ワシントン大学・歴史学科・准教授

寺見元恵 (Motoe Terami Wada) 上智大学・アジア文化研究所・客員研究員

荒沢千賀子・一橋大学大学院社会学研究科・博士後期課程